

霊媒の書

スピリチュアリズムの真髄「現象編」

(199)

四章 さまざまな説

……心霊現象が教えるもの

スピリチュアリズムを正しく理解するには時間をかけて、ありとあらゆる現象を細かく検討しなければならない。大ていの人は自分の体験をもってそれが全てであると錯覚し、その観点から自説を立てる。そこに間違いの原因がある。

では心霊現象が教えるところを十項目に分けて解説しておこう。

- 1、心霊現象は超物質的知性すなわち「霊」が演出している。
- 2、見えざる世界は霊によって構成されていて、至るところに存在する。無辺の宇宙に霊が実在している。我々人間の身のまわりにも存在し、そのうちの幾人かと常に親密な関係にある。
- 3、霊は絶えず物質界に働きかけており、精神活動にも影響を及ぼしている。自然界のエネルギーの一種と見なしてよい。
- 4、霊は本質において我々人間と変わるところはない。かつて地球上または他の天体上で物的身体をたずさえて生活したことのある魂であり、今はその物的身体を脱ぎ捨てているというに過ぎない。従って人間の魂は「肉体に宿っている霊」であり、いずれは肉体の死によって霊になる、ということになる。
- 5、霊といっても千差万別で、善性においても邪悪性においても、

理解力の程度においても無知の程度においても、無数の段階がある。

- 6、霊も進化の法則によって拘束されている。ただし他方において自由意志も与えられているから、努力と決意の程度によって進化の速度が異なる。しかし、いつかは完成の域に到達する。

- 7、霊界における霊の幸不幸は地上時代における善悪の所業と霊性の進化の程度によって決まる。完全にして無垢の幸福感、いわゆる至福の境涯は、完全な霊性を極めた者のみが味わうことができるものである。

- 8、霊は、ある一定の条件のもとで、人間にその存在を顕現してみせることができる。人間と意志の疎通ができる霊の数に限界はない。

- 9、霊は霊能者を媒介としてメッセージを伝えることができる。その場合、霊能者は道具であり、通訳のような存在である。
- 10、メッセージを送ってくる霊の霊性の高さないし低さは、そのメッセージの内容に反映する。高い霊の訓えは善性にあふれ、あらゆる側面にそれが表れている。低い霊の述べることには、どう繕ってみても、偽善と無知と未熟さがうかがえる。

第九章 霊が好む場所・出やすい時刻

昔から霊がよく出没する場所や幽霊屋敷とされているものがあるもので、どここの国でも同じのようである。それに関連した疑問を霊団側に出してみた。

—靈は後に残した者への思いが容易に断ち切れないことがあるようですが、物に対してはどうでしょうか。

「それは靈性の発達程度によつて違つてきます。地上的な物件にしつこく執着している靈がいます。例えば守銭奴と呼ばれているような人間は、死後も、ある場所に隠した財産を見張り、気づかれないように守っています」

—地上には靈が自然に引きつけられる場所とこのがあるのでしょうか。

「地縛的な状態から脱した靈は、親和性のある靈の世界へと赴きます。『物』から『靈性』へと関心が変化したからです。それでもなお地上のある場所への執着を残している者もいます。それだけ、まだ靈性の発達がい低いことの証拠です」

—地上の特定の場所への執着が靈性の低さの指標であるとすれば、それは邪靈の類いに属する証拠とみてよいでしょうか。

「とんでもない。それは間違いです。靈性の発達程度は低くても、性格的に悪くない靈がいます。地上でも同じではないでしょうか」

—靈は廃墟のような場所を好むという言い伝えがありますが、これには何か根拠があるのでしょうか。

「ありません。そういう場所へ行くことはありませんが、特にそういう場所を好むからではありません。どこへでも赴きます。そういう言い伝えが生じたのは、廃墟のような場所に漂う哀愁や悲壮感が人間の想像力をかき立てて、靈がさまよっているかに感じ

るからでしょう。

人間の恐怖心は木の陰を幽霊と思わせ、動物の鳴き声や風の音を幽霊のうめき声と思わせることがよくあるではありませんか。靈はどちらかといえば寂しい場所よりも賑やかな場所の方を好みます」

—自分の遺体が埋葬されている場所へは行きたがるものでしょうか。

「身体は言わば衣服にすぎなかったわけで、その身体に宿っていたがゆえに苦しい目に遭わされたのですから、それを脱ぎ捨てた後はもう未練はありません。クサリにつながれていた囚人は、解き放たれた後、そのクサリに未練など持たないのと同じです。心に残るのは自分に愛の心を向けてくれた人々の記憶だけです」

—埋葬された墓地で祈つてもらうと特別に感じられるものなのでしょうか。家庭や教会での祈りよりも靈には届きやすいのでしょうか。

「ご存じのように、祈りは靈を引き寄せるための魂の行為です。それに熱意がこもり真摯さが強いほど、その影響力は大きくなります。ですから、聖なる葬儀の行われた墓地での祈りは格別の思いを集中しやすいでしょうし、一方、墓石に刻まれた文字を見て故人への情愛を感じやすいという点でも、故人の遺品と同じように、墓地には祈りの気持を高めるものがあることは事実です。

ですが、そうした条件下にあっても、靈に祈りを通じさせるのは『思念』であり、物的な遺品ではありません。物的なものは祈る側の人間にとって意念を集中させる上で影響力をもつだけで、靈そのものには大して影響はありません」

——「引きつける要因」とは何ですか。

「そこへよく行く人間との親和力の作用もあれば、その者と意思を通じていたいという欲求など、いろいろあります。が、いずれにしても余り褒めた理由はありません。恨みを抱いて仕返しチャンスをねらっている低級霊もいます。また、その場所で大きな罪を犯した者が、一種の罰としてそこを徘徊させられている場合もあります。懺悔の念が生まれるまで、その現場を四六時中見せつけられるのです」

——そういう霊を追い払う方法がありますか。

「あります。古来その目的で人間がやってきたことは、追い払うより、ますます付け上がりさせる結果となっています。

一ばん賢明な方法は、善良な霊に来てもらえるように、人間側が善行に励むことです。そうすれば、そういう低級霊も退散して、二度と来なくなります。善と悪とは相容れないものだからです。心掛けの問題です。善良な心掛けの漂う場所には善良な霊しか来ません」

——善良な人でも霊に悩まされていることが少なくないようですが……

「その人が本当の意味で善良な人であれば、そういう悩みは忍耐力を試し、善性をより強固にするための試練かも知れません」

——いわゆる「^{エクソシズム}悪魔払い」の儀式でそういう邪霊は追い払えるのでしょうか。

「エクソシズムが成功した話をどれくらいお聞きでしょうか。

大ていはいまます騒ぎが大きくなってはいませんか。イタズラ霊というのは自分が悪魔扱いにされるのを面白がるものです。

もちろん悪意を持たない霊でも姿を見せたり音を出したりして存在を知らしめようとする場合があります。が、そういう場合の音が人間に迷惑を及ぼすほどになることはありません。死後迷っている霊かも知れません。そうであれば祈りによって救ってあげるべきでしょう。時には親しい間柄の霊が存在を示そうとしている場合もあります。ただのイタズラ霊の場合もあるでしょう。

迷惑を及ぼすような場合は間違いなく低級霊で、することがなくてそうやって遊んでいるだけです。そういう場合は一笑に付して無視することです。何をやっても人間が恐がりもせず大騒ぎもしなくなると、バカバカしくなって止めるでしょう」

十章 自動書記現象の種々相

④ 靈感書記

通常意識の状態ないしはトランス状態で自分の精神の作用以外の始源から思想の流入を受け取ってそれを書き記すもので、②の直覚書記ときわめてよく似ている。唯一異なる点は、その思想が霊的始源からのものであるとの判断が明確にできないことで、靈感書記の最大の特徴はその自然発生性、つまり霊媒自身はそれをインスピレーションであるとの認識が定かでない点にある。

そもそもインスピレーションというのは、良きにつけ悪きにつけ、霊界から我々人間に影響を及ぼす霊から送られてくるもので、日常生活のあらゆる側面、あらゆる事態における決断におい

て関与していると思つてよい。

その意味においては我々は一人の例外もなく靈感者であると言える。事実、我々の周りには常に幾人かの霊がいて、良きにつけ悪しきにつけ、リモート・コントロール式に我々を操っている。

その事実から、守護霊を中心とする背後霊団の存在意義を理解しなければならない。人生には右か左かの選択を迫られる時機、何を言うべきかで迷う時があるものだが、そのような時に守護霊からのインスピレーションを求めることができる。自分と最も親和性の強い類魂であるとの知識に基づいた信念をもつて祈り、あるいは瞑想によつて指示を仰ぐ。

それに対する霊団側の反応は、最高責任者である守護霊の叡知によつて一人一人異なる。まるで魔法のごとく名案を授かるかと思えば、何の反応も得られないこともある。そのような時は「待て」の指示であると受け止めるべきである。

よく耳にする話として、格別の霊的能力があるわけでもなく、また通常意識に何の変化があるわけでもないのに、一瞬の間に思想の奔流を受け、時には未来の出来事の予言まで見せられ、本人はただ啞然としてそれを受け止めるといった現象がある。そして終わつてみると、それまでの悩みも苦しみも、跡形もなく消えている。

さらに天才と言われる人たち――芸術家、発明家、科学的発明者、大文学者等々――も高級霊の道具として偉大なるインスピレーションを授かるだけの器であつたということであり、その意味では霊媒と同じだったわけである。

第十三章 低級霊に憑依されるまでの三つの段階

スピリチュアリズムの現象面につきものの問題の中でも第一位にランクされるものは、憑依現象、つまり霊が地上の人間を完全に支配してしまう現象であらう。ただしこの場合の霊は決まつて低級霊で、諒解なしに良からぬ意図をもつて操っている。

高級霊が憑依する時は、本書で紹介している通信霊のように、人類の啓発という目的をもつて、霊媒の諒解を得て書いたり語ったりしている。終われば憑依状態を解き、霊媒は普段の精神状態に戻る。また霊媒自身あるいは立会人に理解力がないとみたら、二度と出なくなる。

これと違つて低級霊が悪意をもつて取り憑く場合は、いったん目をつけたらしつこく付きまとい、子供を扱うように手玉に取る。そして当人だけでなく、その親族にまで迷惑を及ぼす。

“憑依”というのは概括的な用語で、そのメカニズムと、憑依された人間に表れる霊障によつて、三つのタイプに分けられる。まず“付きまとわれる”だけの場合。次が“幻惑される”場合。そして“取り憑かれる”場合である。詳しく解説しよう。

(一) しつこく付きまとわれる

前章の問答の中でも述べられているように、どんなに優秀な霊媒でも低級霊につけ入られて、愚劣きわまる通信を受けたら霊言を述べたりする。この事実から想像がつくように、霊媒や霊能者は常に低級霊や邪霊につけねらわれていると思つてよい。が、その段階ではまだ憑依ではない。かりに波動が合つて通信状態に入つても、それは一時的であつて、すぐに縁は切れる。いくら用心

していても正直な人間ほど人に騙されることがあるのと同じである。また霊団側でも一つの警告として体験させることすらある。

これには実害はない。(ここでは霊的なことに携わっている人に限った言い方になっているが、実際には普通一般の者にも当てはまる。『霊の書』の中に、一人の人間が殺意を抱いた時、それに感応して邪霊が一気に群がってくるという主旨の一文がある——訳者)

(二) 幻惑される

(一) のようにしつこく付きまとい、日常生活に支障を来す程度のもに“幻惑”が加わると、さらに深刻となる。邪霊が思念そのものに直接的に働きかけて幻想を生じさせ、正邪・善悪の判断力をマヒさせるのである。

たとえば自分は神の化身であると思ひ込ませ、それらしき勿体ぶった態度で託宣を述べさせる。誰が聞いても滑稽こっけいきわまる内容なのであるが、その辺の判断力がマヒしているから、本人はみじんもおかしいとは思わずに大まじめで大言壮語をする。

こうしたケースは無知で無学の者にかぎられると思うのは大間違いである。知的職業に携わる者でも、安直に霊能開発などを始めると、こういう醜態をさらす。見えない次元で異常なことが起きていることは明らかで、それが邪霊・悪霊の画策である。

今、この種の憑依を“さらに深刻”と述べたのは、憑依霊によって幻惑されてしまうと、どんなにバカげた話でも大まじめに信じ込み、時には無分別で、不名誉で、危険なことでも平気でするようになるからである。

(一) の段階と(二) の段階は容易に見分けがつく。それはそのまま低級霊の種類の違いでもある。

(一) の段階では“しつこく付きまとわれる”という点が厄介なだけで、本人もその状態を客観的に見つめることができる。そして、こんなことではいけないと判断すれば、危険から逃れることは可能である。

が、人間には見栄がある。異常なことが起きることから自分が特殊な人間であるかに思い始めると、次第に(二) の段階へと移行する。憑依霊の方も狡猾こつかつで手練手管に富んでいるから、巧みに思考活動にまで入り込んで、“慈悲心”だの“人類救済”だの“神の愛”といった美辞麗句を吹き込む。当人はすでに魅入られているから、救世主にでもなったかのような錯覚に陥って、大まじめにそれらしいことを口にする。

この際、低級霊にとっていちばん困るのは洞察力に富んだ立会人(司会者・さにわ)が存在することで、自分の画策が見抜かれ、当人が説諭されて理性を取り戻すことを恐れる。そこで自分たちがこしらえた“お告げ”の矛盾に気づかれないようにと知恵を絞る。が、全体としての低劣さ、齒の浮くようなキザな表現は覆うべくもない。

(三) 憑依される

最終段階には当人の自由意志は完全にマヒし、人格全体が憑依されてしまう。ただし、この憑依状態にも精神的と肉体的の二種類がある。

精神が憑依されていく場合は、支離滅裂な行為をしながら、それを正常で立派な行為とと思っている。(二) の幻惑状態の一種であるが、異なるのは、思考活動だけでなく自由意志まで奪われていることである。

肉体的に憑依されている場合は肉体器官そのものも支配されて、不随意筋まで自由に操られるようになる。メカニズム的には自動書記や霊言現象と同じであるが、憑依している霊の霊格と動機が異なる。

自動書記や霊言の場合は、終了すれば霊は去り、霊媒の人格は通常に戻る。が、邪霊による憑依の場合は、書くもの（ペンやエンプITSなど）も持たずに通路上とかドアとか壁に書く仕事を延々と続けるようになる。

かつては異常行動をする者はすべて「悪魔の憑依」とされた。が、「悪の化身」という意味での「悪魔」は存在しない。霊性の進化の程度が低いという意味での低級霊で、その発想に邪悪な要素が強いというにすぎない。

では一体そうした低級霊はいかなる動機から憑依しようとするのであろうか。招霊して聞き質してみたところによると、その憑依霊によってそれぞれ違うようである。

怨みを抱きながら他界した者が霊界から復讐しようとしている場合がある。前世または前前世での怨念が絡んでいる場合すらある。

別にそうした怨念があるわけではなく、困らせてやりたいという、ただそれだけの動機からの場合もある。

地上時代に苦勞が多かった者が、幸せに暮らしている子孫が癪に思えて取り憑くこともある。

善なるものに対する憎しみから、真面目に生きている人間を困らせようとする者もいる。同じ取り憑くなら悪事を働く者を選んだらどうかと尋ねたら「悪いヤツらのことは羨ましくは思わんよ」と答えた者がいた。

気の弱そうな真面目人間を選んで取り憑こうとする者もいる。そのわけを尋ねたら「オレは誰かをいじめたくて仕方がないんだ。が、しっかりしたヤツには追っ払われる。この間抜け（取り憑いている人間）にはオレを追い出すほどの徳の力がないもん」などとうそぶいていた。

さらに又、悪意というほどのものは持たなくても、軽薄なプライドから尊大になり、科学や社会問題、倫理・道徳・政治問題等に関する自分の考えが最高であると思いがって、それを伝えてくれる人間を求めることもある。

十五章 「招霊」にまつわる様々な問題

一問一答

— 霊は霊能者でなくても呼び出すことができますか。

「誰にでもできます。客観的に姿を見せることはできなくても、ちゃんと近くにいる、あなた方の要望を聞くことができます」

— 呼ばれたら必ず出るもののですか。

「それはその時の霊の置かれている条件によって違ってきます。出たくても出られない事情もあります」

— この広大な宇宙にあまねく散在する霊や他の天体上で生活している霊が、どうやってこの遠い地球からの呼び出しに応じられるのでしょうか。

「その霊をよく知っている親和性のある他の霊が前もって察知

し、あなた方の意図を伝えます。が、その連絡はあなた方には説明できない霊界特有の方法で行われます。霊の思念による伝達は人間には理解できません。強いて言えば、招霊に際してあなた方が発する思念の衝撃波が、どんなに遠く離れていても一瞬の間にその霊に届き、それが電気ショックのように意識に伝わります。そこでその霊は注意をその方向へ向けます。地上では「話された言葉を聞く」わけですが、こちらでは「思念を聞く」とでも表現しておきましょうか」

——魔よけとかまじない札を用いる人がいますが、こうしたものに善霊を引き寄せたり悪霊を追い払ったりする力があるのでしょうか。

「今さらそのような質問をなさることもないでしょう。物には霊に対して何の影響力もないことくらい、ご存じのはずです。少し気の利いた霊ならそんな愚かなことは説きません。お守りの効用は信じやすいお人好しの想像の中にしか存在しません」

——出てきたのが低級霊だと判明した時、引き下がってもらうにはどうすればよいでしょうか。

「取り合わないことです。ですが、そもそもそういう低級霊につけ入られるような愚かなことをしていながら、それに感応して出てきた霊がどうして簡単に引き下がりましょう？ 人間界と同じで、魚心あれば水心です」

——神の御名のもとに招霊すれば邪霊の出現は防げるでしょうか。

「全ての邪霊に通用するとはかぎりません。神の御名の響きでたじろぐ者はかなりいるでしょう。信仰心と誠意をもって唱えれ

ば低級霊は逃げますし、それに強烈な信念が加われればさらに効果的でしょう。ただの紋切り型の呪文を唱えるだけではだめですが……」

——自分の死を予知する人がいますが、これはいかがでしょうか。

「霊が肉体から離れている間に死期が近いことを感知し、それが肉体に戻ってから意識に残っているケースです。それほどの人になると、その予知によって恐れを抱くことも戸惑うこともあります。一般に「死」と呼んで恐れているものを、ただの「変化」と見なし、譬えて言えば厄介な重苦しいオーバークートから軽やかなシルクのコートに着替えるのだと考えます。スピリチュアリズムの知識が普及するにつれて死の恐怖は薄らいでいくことでしょう」

——霊に助言を求めることは許されますか。

「もちろんです。善良な霊が、真摯に求めてくる者を拒絶することは絶対に有り得ません。とくに「生き方」に関して真剣に意見を求める場合はそうです。あくまでも真剣でないといけません。実生活ではいい加減な生き方をしながら、交霊の場では真剣な振りをする偽善者は受けつけません」